

二〇一三年ドイツ連邦議会選挙

——強い宰相アンゲラ・メルケルと変容した政党分布——

今 野 元

序

ヨーロッパ連合で指導的役割を果たすドイツ連邦共和国（以下便宜的に「ドイツ」）では、2013年9月22日に連邦議会選挙が行われた。筆者は同議会選挙を、史料収集旅行（9月8日－27日）の傍らで見ることができた。またその準備段階を、前年4月から10箇月のドイツ滞在で観察していた。そこでの見聞を踏まえて、本論では今年の連邦議会選挙を回顧してみたい。

今回の連邦議会選挙の焦点は、以下の二点に要約できる。(1)連邦宰相アンゲラ・メルケルという人物の強烈な存在感が選挙中の話題を攫った点。政党間の政策論争は存在したものの、メルケル論の背景に隠れてしまった印象が強い。(2)東西統一以来5党からなっていたドイツの政党分布 (Party System)¹⁾に変容が生じた点。自由民主党が初めて連邦議会から退場した結果、東西統一後長らく反体制政党扱いされてきた左派党が野党第一党になる見込みで、更に「ドイツのための選択肢」という誕生まもない政党が、阻止条項を克服する寸前まで票を伸ばした。

1. ドイツの選挙光景

(1) **政権交代**：4年に1度の連邦議会選挙は、ドイツ政治を形成する中心的な要因である。ドイツ連邦共和国では、野党側が「解散総選挙で民意を問え！」と連呼することはない。一旦或る人物を連邦宰相に選んだら、通常は4年間選挙なしに任せるという習慣が、ドイツ政治に安定したリズムを与えている。政権交代も十分可能なので、現在の与党に嫉妬や反感を懐くより、次回選挙で自分たちが与党になるのを目指す方が、野党としては生産的である。

ドイツの現在の政党分布は、キリスト教民主同盟 (CDU)／キリスト教



主要政党の選挙ポスター
(フライブルク・2013年9月9日)

社会同盟 (CSU) と社会民主党 (SPD) とを2大勢力とする「緩和された二大政党体制」である。右派政党のCDUとCSUとはバイエルン州以外とバイエルン州で住み分けており、形式的には別政党であるため、必ず一緒に行動するという保証はないが、従来の連邦議会では統一会派を組んできた。SPDは19世紀以来の老舗政

党で、現在でも左派勢力を代表している。だがこの两会派とも単独過半数の獲得が困難なため、連邦議会に議席を有するこれ以外の3党が連立相手として浮上してくる。つまり中道政党の自由民主党 (FDP)、急進左派諸政党の90年同盟／緑の党 (Bündnis 90/Die Grünen)、左派党 (Die Linke) である。

政策が近く安定した政権運営ができるのは、黒黄連合 (CDU/CSU・FDPの右派中道政権)、赤黄連合 (SPD・FDPの左派中道政権)、赤緑連合 (SPD・緑の党の左派政権) であり、通常そのどれかを目指して選挙戦が戦われるが、どれでも過半数が獲得できないときは、やむを得ず大連合 (CDU/CSU・SPD)、黒緑連合 (CDU/CSU・緑の党)、赤赤緑連合 (SPD・左派党・緑の党) を目指すことになる。連邦政府で先例があるのは大連合で、1966年のキージンガー政権、2005年の第一次メルケル政権がそれに当たる。

各政党は「宰相候補」(Kanzlerkandidat) を掲げて戦うため、ドイツ連邦議会選挙は事実上「宰相公選制」であるかのような様相を呈している。2大会派以外の宰相候補は実質的に連邦宰相になれないので、選挙戦は事実上CDU/CSUの候補とSPDの候補との一騎打ちとなっている。宰相候補となるのは党首とは限らず、その時々的人气政治家が投入される。

各政党が「宰相候補」を掲げて一丸となって戦う選挙は、必然的に政党本位である。個々の議員の活動実績が話題になることは少ない。候補者の名前を連呼する選挙カーもなく、選挙戦は静かである(但し宰相候補などを呼んでの政党集会在、街中で行われることはある²⁾)。ドイツでは一部の花形政治家のみが表舞台で活躍し、何年でも要職を務める。多くの議員

が交代で一度は大臣になるなどという習慣もなく、多くの陣笠議員は全国的には無名のまま終わる。芸能界やスポーツ界での有名度のみを武器に当選するタレント議員はいない。

(2) **選挙法**：「個人の要素を加味した比例代表選挙」と言われ、1枚の投票用紙に二箇所☑するところがある。第1票は小選挙区制への投票、第2票は比例代表制への投票である。①各政党への議席配分は基本的に比例代表制で決定する。②全議席の半分は小選挙区制で決定する。③残りの半分の議席は各政党が州毎に提出する拘束式名簿で決定する（名簿掲載者のうち小選挙区制で既に議席を獲得している者はこの段階での議席配分からは外れる）。④小選挙区制で獲得した議席数が比例代表制で配分された議席数を上回る場合には、小選挙区制での獲得議席数がその政党の獲得議席になる（この場合は総議席数も増加する）。

投票は全299選挙区に設けられた各投票所で行われる。投票時間は8:00から18:00までである（これ以外の時間に特設投票所を設ける「不在者投票」はないが、代わりに「書簡投票」がある）。今回筆者はその一つである、第222選挙区（ミュンヘン農村部）のアイング村の投票所を見学した。ミュンヘン郡アイング村はビール「アインガー」の醸造で知られる集落で、ミュンヘン中心部からはSバーン(S7)で直接行くことができる。教会前の村立公民館（Bürgerhaus）に投票所が設けられ、人々が次々に投票に訪れていた。投票所となっている部屋には十字架上のイエス像が掲げられ、覆いを付けた6つの記載用机が置かれ、一つ用意された投票箱のそばには、民俗衣装の立会人3名（老年男性、中年男性、中年女性）が陣取り、投票者が来るたびに投入口の蓋を開



アイング村の投票所（2013年9月22日）



アイング村の投票所内
（2013年9月22日）

け閉めしていた。

選挙ポスターは公設掲示板もなく、電燈柱など各所に無造作に掲示されている。各候補のポスターは各政党で色や様式に共通性があることが多く、政党自身のポスターもある。右派政党、急進ナショナリズム政党、「ドイツのための選択」党、左派党など、反体制的と見られた政党のポスターは、よく破壊されている。このため、急進ナショナリズム政党（共和党、民族連合、国民民主党など）は、破壊されないよう高い場所にポスターを掲示する習慣がある。

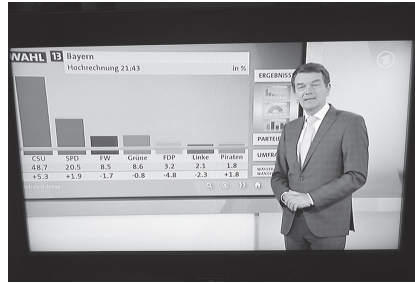
今回の連邦議会選挙では、テレビで1分ほどの政党の政見放送が流された（候補者個人のものはない）。このため泡沫政党、例えば急進ナショナリズム政党の政見なども、主要政党のものと同じ扱いで、テレビ局側の否定的論評なしにそのまま流されるという、ドイツでは新しい事態が生じた。

今回の連邦議会選挙では、ポーランドのドイツ系少数派にも投票が認められた。ドイツ旅券保有者が9月1日までに登録すると、ポーランド領内から書簡投票ができるのだという。ポーランドにはドイツ系住民の大量追放にも拘わらず残留した者がおり、現在では30万から40万のドイツ系少数派が住んでいるという。長く禁忌であった彼等の存在は、冷戦終焉後に公になっていくが、ポーランドのEU加盟でドイツとの国境の壁も低くなり、いまではドイツから公然と文化的支援などが行われている。ナショナリズム批判の時代でも残る民族意識の強さを垣間見せる事例である³⁾。

(3) 選挙報道：全国ネットの2つの公共放送（ARD・ZDF）は政党の議席数のみに注目する。これは即ち、次の政権がどう組まれるかのみが関心事だということである。両放送局はそれぞれ調査に基づき18時に一気に各政党の議席配分を発表し、実際に開票が進むに連れ多少の修正はあるものの、概ね18時発表の内容のまま変わらない。個々の候補者の運命は報道されず、後日の新聞報道を待つことになる（但しバイエルン放送のような地域ネットは個々の候補の当落も報道する）。各政党本部からの中継はあるが、個々人の事務所の紹介は全くない。選挙報道は緊迫したテレビ番組だが、タレントを呼んでの「バラエティー番組」化は一切見られない。

ある程度開票が進んだところで、スタジオに各政党代表を呼んで半ば討論会的なインタビューがある。今回のFDPのように、当選者を出さなかった政党は、ここで無慈悲に切り捨てられる。逆に急進ナショナリズム政党

などでも、地方選挙で当選者を出せば、その場に呼ばれる。その場合、テレビの司会者は急進ナショナリズム政党の代表を、他政党の代表とは区別して、はっきり軽蔑的に扱う。また他政党の代表は、急進ナショナリズム政党の代表のインタビューになると、抗議の意味で退席してしまい、発言中に中継しているテレビカメラの前をわざと横切る者もある。言論の自由を認め、どのような意見でもまずは聞いてみるというのではなく、連邦共和国の体制を肯定することが絶対条件であり、体制批判は語らせないという流儀は、「戦う民主制」の一表現である。尤も連邦議会では急進ナショナリズム政党は当選者を出せないで、そうした光景は見られない。



バイエルン州議会選挙の報道
(ARD・9月15日)



バイエルン州議会選挙の報道
(バイエルン放送・9月15日)

2. 今回の連邦議会選挙の争点

(1) **メルケル黒黄政権は存続するのか**：この点については、以下の二つの要因を検討してみたい。

① **アンゲラ・メルケル (CDU 党首・宰相候補)** という人物：アンゲラ・メルケル (旧姓カスナー) は1954年西独ハンブルク生まれで、牧師だった父の赴任に従い東独で育った。メルケルは社会主義統一党 (SED) の下部組織「自由青年団」(FDJ) の団員にもなっていた。元々物理学博士であったメルケルが、東西ドイツ統一の変動を契機に突然政界入りを標榜し、政界経験の殆どないまま、いきなり1991年1月に連邦女性・青少年問題担当大臣に抜擢されたのは、当時の連邦宰相ヘルムート・コールの引きによるものであった。「コール・ガール」(Kohl-Mädchen) と揶揄され、政権

のお飾り的な意味合いが大きかったメルケルが、徐々に頭角を現していく契機が、1998年9月のコール政権崩壊であった。メクレンブルク＝ヴォルポンメルン州党代表だったメルケルは、このとき州政権を失いながらも、指導者としての覇気を示して注目された。新しいシュイブレ党首体制の下で幹事長に抜擢されたメルケルは、長年コールの「皇太子」(Kronprinz)と言われたヴォルフガング・シュイブレが、1999年に名誉党首コールと共に闇献金疑惑で失脚すると、早々に恩人コールと袂を分かって、2000年俄かに党首に就任する。とはいえ当時のメルケル CDU 党首は、1998年以來の CSU 党首エドムント・シュトイバーのジュニア・パートナーでしかなかった。2002年の連邦議会選挙では、人気絶頂のシュトイバーが CDU/CSU 会派の統一宰相候補となる。ところがイラク戦争反対の平和攻勢、折からの洪水への対策で好感度を高めたシュレーダーが、シュトイバーの猛追を交わして続投に成功する。シュトイバーがバイエルの地域色を払拭できない中、2005年の連邦議会選挙で CDU/CSU 会派の統一宰相候補になったメルケルは、第二次シュレーダー政権の不人気を背景に第一党の座を確保するが、CDU/CSU と SPD との差は僅かであり、黒黄連合は過半数を得られなかった。そこでやむを得ず CDU/CSU・SPD 大連合が試みられ、難航した交渉の末に第一次メルケル政権が誕生した。2009年の連邦議会選挙では、SPD の大敗と FDP の大勝を踏まえて、連立相手を FDP に変えて第二次政権を結成し、2013年の連邦議会選挙を迎えている。今回の選挙に際しては、党内の宰相候補者使命で圧倒的な支持を得、CDU の選挙集会でも Angie のプラカードが多く揺れることになった。

最近では政治家メルケルの指導スタイルが注目されている。この問題で近年話題となっているのは、以下の二つの点である。(1)信念が(見え)ない事。フェミニストが「女性らしさ」を語る行為自体を排除しようとする中で、実は女性が指導者になって、目立とうとせず、融和志向で、結果として効果的であるという政治指導の「女性らしい」特徴が見えてきたと見る見解もある⁴⁾。よくメルケルと並び称される英首相マーガレット・サッチャーは、強いイギリス国家の再建を目指して、フォークランド戦争と福祉国家再編を毅然と推進した結果、信念の政治家として敬意を集めつつも、葬儀の日まで抗議運動を呼び起こすことになった。安部晋三首相も明確な国家像を掲げ、二度目は強い人気を背景にこれを実行しようとしているが、これを絶対許容しない勢力もいる。これに対しメルケルは、固執するところ

がないのが強みであり、それは東ドイツ時代、自然科学者時代から培われたものだと、文学者ゲルトルート・ヘーラーは言う⁵⁾。メルケルはドイツ宰相として統一後初の東独出身、史上初の女性であることで注目されるが、東西ドイツ和解やフェミニズムに熱心であるという印象はない。メルケルのCDU/CSUは勿論比較的保守的な政策を掲げるが、メルケル本人が保守主義者なのかどうかはよく分からない。2011年には原発廃止を打ち出して注目されたが、元来2009年の選挙戦ではシュレーダー政権の原発廃止路線の撤回を訴えていたのであり、バーデン＝ヴュルテンベルク州議会選挙を直接頭頭に置いての窮余の一策であって、実行可能性は未だ不透明なままである。メルケルはコールの閥献金疑惑の際は大恩人からいち早く離反する冷酷さを見せた。メルケルの信念が見えず（あるいは元々なく）日和見主義な印象がある点は、ビスマルクの折衷路線を思わせるものがある。現在メルケルは安定感がある政治家として好意的に評価されており、仇敵を作りにくい性格は大連合政権を率いるには向いているかもしれないが、善悪の評価は将来転換する可能性もある。「社会国家」の再編と「移民国家」の定義という大目標を遂行し、与党内からも反撥を買って退陣したが、のちのドイツ政治の基盤を築いたシュレーダー政権に比べると、メルケル政権は政策形成が停滞している印象は否めない。メルケル人気を支えるドイツの好景気も、シュレーダー政権による「社会国家」再編、南欧諸国の債務危機によるユーロ安を背景としており、メルケル政権の成果なのかどうかは疑問である。(2)競合者の存在を許さない事。フリードリヒ・メルツ、クリスティアン・ヴルフ、カール・テオドル・フォン・ウント・ツー・グッテンベルク男爵、アンネッテ・シャヴァンなど、21世紀初頭に保守政治家として有力視された同世代、若手の人物は、メルケル党首の下でいずれも政界（の第一線）を去った。彼等の失脚がメルケルの陰謀であるとは言えまいが、現在側近を務めている人々、例えば党議員団長フォルカー・カウダー、党幹事長ヘルマン・グローエ、連邦環境大臣ペーター・アルトマイヤーなどの中に、メルケル後を担えそうな人材はいない。前述のヘーラーはこの現象を、メルケルが価値判断禁欲を武器に権力闘争を遂行しているのだと説明する⁶⁾。メルケルと目を合わせると、SPDの男たちは石になってしまう、メルケルはメドゥーサだなどという冗談（クラフト）もある⁷⁾。競合者がいない政権が安定しているのは確かだが、保守勢力の将来にとっては不安定要素となり得る。

②自由民主党の危機：自由主義政党の危機はヨーロッパの一般現象で、ドイツ特有の現象でも、個々の政治家の失策の所為でもない。19世紀初頭にフランス革命の理念に感化され、絶対君主制国家と戦うべく誕生した自由主義諸政党が、20世紀に不振に陥ったのは、自由主義政党の掲げた課題が法制度上は概ね達成されたからでもある。それでもドイツ連邦共和国でFDPが存続し得たのは、テオドル・ホイス、ヴァルター・シェール、ハンス＝ディートリヒ・ゲンシャーといった印象的な政治家が幾人か登場したこと、CDU/CSUかSPDかという二者択一を緩和し、連立相手として長年与党内で活動してきたことが評価されたものと思われる。

FDPはこの4年間存続の危機に立たされていた。1998年から2009年までFDPは長い野党時代を経験し、2009年の連邦議会選挙では歴史的大勝を遂げた(14.9%)が、これは緑の党、左派党も同じで、共に大連合への批判票を吸収してのことだった。与党に復帰したFDPは、減税という選挙公約を達成できず支持が急落し、州議会からの退場が相次ぎ、党首をギド・ヴェスターヴェレ連邦外相からフィリップ・レースラー連邦経済技術大臣(のち更に副宰相)に替えるという奇策に出た。レースラーはドイツ軍人の家庭に養子入りしたヴェトナム戦争孤児で、軍医を経て政界入りした、史上初の東アジア系ドイツ閣僚である。トルコ系出自を前面に出し、ドイツ社会の多文化主義化を高唱する緑の党共同党首エズデミルとは逆に、レースラーは移民系であることを自己アピールの材料にせず、カトリック教徒で、ドイツ語系の姓名を有し、ドイツ語能力も申し分ない、同化の優等生である。レースラーのような人物を引き立てることは、移民的背景を持つドイツ国民に、同化すれば未来が開けることを示すという意味がある。



FDPの街頭選挙活動
(バーデン＝バーデン・2013年9月14日)

る。しかし政界経験が浅い40前後の人物に大臣職、更に党首職、副宰相職を任せるのは過大負担であり、また東アジア系の風貌だと実年齢より幼く見えるためか、党内で強い求心力を発揮することは出来ず、今回の連邦議会選挙ではFDP宰相候補は長老の議員団長ライナー・ブリューデルレに決まった。

FDPの消滅はメルケル政権の命運を左右する問題である。というのもCDU/CSUだけでは単独過半数獲得が困難で、左派諸政党との連合では政権運営が難しいからである。だがCDU党首メルケルは、この選挙でFDPに比例代表票を一部譲るといった選挙協力することを拒否した。

(2) **シュタインブリュック赤緑政権は誕生するか**：この点については、以下の二つの要因を検討してみたい。

①ペール・シュタインブリュックという人物：シュタインブリュックはノルトライン＝ヴェストファーレン州首相を経て、第一次メルケル政権で連邦財務大臣を務め、堅実な財政家という印象があり、欧州債務危機に揺れる2012年にSPDの宰相候補として浮上した。だが講演料などの副収入が多額だったり、連邦宰相の歳費が銀行頭取と比べ安いのは問題だと発言したりして物議を醸し、『南ドイツ新聞』付録雑誌に中指を立てて挑発するようなポーズなどおどけた写真を掲載させて品位を疑われるなど、多難な選挙戦となった⁸⁾。またノルトライン＝ヴェストファーレン州首相で、2012年の州議会選挙で大勝したハンネローレ・クラフトの人気が上昇し、主役のシュタインブリュックを脅かした⁹⁾。

選挙戦におけるSPDは第二次メルケル政権を厳しく批判した。SPDは左派政党にも拘らず、シュレーダー政権が「社会国家」再編に舵を切ったために支持層の分裂を招き、ドイツ経済には貢献したが勢力を減退させた。第一次メルケル政権では連立の一角に埋もれ、連立相手のCDU/CSUとの差異化が難しかった2009年の連邦議会選挙では歴史的な大敗を喫した。2013年の連邦議会選挙では、SPDは2009年の轍を踏まないようにするべく、メルケルのギリシア支援策が厳格すぎるとしてユーロ共同債を主張し、また国内では最低賃金を一律導入することを求め、「育児給付」(Betreuungsgeld：幼稚園など公共施設に行かず自宅に保育される2・3歳の幼児を持つ家庭に一律に給付する補助金)に反対し、習慣が異なるイスラム児童に専用の体育授業を要求するなど、CDU/CSUとの差異化に努めた。但しそれらの政策は緑の党や左派党よりは穏健なものであり、またそれらの実行可能性に関する議論も深まらなかった。

②左派党の基盤拡大：左派党は主要政党から反体制政党として爪はじきにあってきた。左派党は、2007年に旧東独の事実上の独裁政党SEDの後継政党「民主的社会主義党」(PDS)に、シュレーダー政権の「社会国家」再編に抗議するSPD最左派脱党組が合流して成立した政党である。

旧独裁政党、共産党という印象のある PDS は、東西統一直後に消滅するのではとの観測もあったが、実際には予想を裏切り、旧東独地域、特に旧東ベルリンの地域代表政党として定着した。2000年頃、あるテレビ討論会で、コールの顧問だったホルスト・テルチクは、「自分たちを長年苦しめた独裁政党にわざわざ投票する東独の人々の行動は理解できない」と述べていたが、旧東独政権党を連邦共和国の反体制政党として、急進的ナショナリズム政党と同じく「非国民」扱いするような言動は、SPD 政治家にも見られる。西独人の傲慢さに憤慨し、旧東独地域の不況に苦しむ人々が、PDS を存続せしめたのである。

PDS は依然旧東ベルリンを牙城としていたが、左派党になって旧西独地域での活動も目立つようになってきた。既に2009年の連邦議会選挙でも旧西独地域でのポスターが目立ったが、今回も同様である。ブランデンブルクなど一部の州では政権に参加もしている。選挙戦でシュタインブリュックは左派党に侮蔑的態度を示し、同党との連合政権は論外なので、飽くまで赤緑政権を目指すとした。だが赤緑連合では過半数獲得は困難なことから、左派党を加えた左派総連合(赤赤緑)の政権形成の可能性が話題となっている。

左派党は東西両地域に拡大しつつあるが、それに伴って内部対立も熾烈さを増している。2012年のゲッティンゲン党大会では新党首選出が難航し、旧 PDS 派で「現実派」のグレゴール・ギジと旧 SPD 最左派で「原則派」のオスカル・ラフォンテーヌが感情的に対立するという一幕もあった。多様な内部派閥があり、旧東独派の最左派(共産主義綱領派)として有名だったザーラ・ヴァーゲンクネヒトがラフォンテーヌと同棲を始め、その感情剥き出しの戦闘姿勢を「コピー」するなど、私生活も絡んで対立構図は先鋭化している¹⁰⁾。ちなみに今回の選挙戦では議員団長ギジが宰相候補となった。

(3) 海賊党は連邦議会に進出できるか：「海賊党」(Piratenpartei)はスウェーデンから各国に広まった、インターネットを駆使する若者世代の政党で、個人のプライバシーを重視し、著作権廃止、大麻合法化などを要求して話題になった。この政党は当初包括的な党綱領を持たず、多くの政策領域で「検討中」と答え、不勉強でも開き直るなど、人を食ったような態度が目立つ素人集団であるが、2011年9月18日ベルリン州(市)議会選挙に進出して、ドイツ社会に衝撃を与えた¹¹⁾。同党は更に2012年3月

にザールラント州議会、5月にシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州、ノルトライン＝ヴェストファーレン州議会に進出している。従来新世代の党を自認し、個人主義の先兵だった緑の党は、より若い世代の擡頭に慌てふためいた。その後海賊党は、急進ナショナリズム政党所属歴がある人物が所属していることが判明したり、党幹部が自党の擡頭をかつての国民社会主義党の擡頭に譬えたりという問題が持ち上がり、2012年の党大会も内部の混乱ぶりを露呈するものであった。今回の選挙戦で、この海賊党が連邦議会で議席を獲得できるかが注目されていた。



海賊党の選挙ポスター
(ミュンヘン・2013年9月22日)

(4) 「ドイツのための選択肢」は連邦議会に進出できるのか：「ドイツのための選択肢」(Alternative für Deutschland)は、2013年2月6日に結党された右派政党である。この政党は欧州債務危機を踏まえて、ドイツのユーロからの離脱とドイツ・マルクへの復帰を掲げて旗揚げした。国益の観点から欧州統合への批判をすることは、英仏では許されても、ドイツでは唱えただけで社会的信頼を失いかねない。従来は急進ナショナリズム政党に限られていたこうした主張を、ハンブルク大学マクロ経済学教授ペルト・ルツェや、『フランクフルター・アルゲマイネ』、『ヴェルト』の元編集人コンラート・アダムのような社会的地位のある人物が、「サロンに出入りできるように」(salonfähig)したところに新味がある。

「ドイツのための選択肢」登場には予兆があった。2010年、SPD党員でドイツ銀行理事のティロ・ザラツィンが著書『ドイツは自滅する』を刊行し、少子高齢化に悩むドイツ人は、移民系住民の増加により自国において外国人になっ



破壊された「ドイツのための選択肢」
の選挙ポスター
(フライブルク・2013年9月9日)

てしまうと警鐘を鳴らし、国民社会政権の過去を気にして国益を論じられない自国民に苛立ちを表明したのである。従来一部の急進ナショナリストに限定されていた主張を高唱し始めた SPD 党員に、当初反撥が相次いだことは無論だが、エリートの間でもハンス＝オラフ・ヘンケルやヘルムート・シュミットなどは支持に回った。ザラツィンはドイツ銀行理事を解任されたが、SPD 党員ではあり続け、2012年には『ドイツはユーロを必要としない』を発表し、「ドイツのための選択肢」を先取りした。ザラツィンの登場や「ドイツのための選択肢」の登場は、ドイツ「六八年世代」の観念世界への異議申立として理解できる¹²⁾。

3. 2013年ドイツ連邦議会選挙の展開

(1) バイエルン州議会選挙 (2013年9月15日): 「バイエルン自由国」¹³⁾は CSU が万年与党の州であり、自由民主党がほぼ万年与党である日本と類似している。エドムント・シュトイバー州首相の下で行われた2003年の州議会選挙では、CSU は60.7%の得票で圧勝し、3分の2以上の議席を獲得した(もっとも1974年のアルフォンス・ゴッペル政権期に CSU は62.1%を挙げており、それ以外でも1970年から2008年の敗北までは常に50%以上であった)¹⁴⁾。多くの基礎自治体も CSU が押えるが、州都ミュンヘンの市政はほぼ常に SPD 政権で、現市長クリスティアン・ウーデ市長の人気は高い。ただいずれの党員であれ、バイエルン州の政治家には「バイエルン愛国主義」の演出を競う傾向があり、皮ズボンやディルンドルを着用し、バイエルン独特の発音を誇示する様子、いわば政党人である以前に皆バイエルン人であるという自己認識は、ドイツ内他州に類例を見ない。ウーデにしても、ミュンヘン市長として皮ズボンに身を包み、毎年オクトーバーフェスト開会式で「ビールの準備が出来たぞ」(O' Zapft is) とバイエルン語で高らかに宣言する姿は、普通の左派政治家とは相当違うものである。

前回2008年のバイエルン州議会選挙では、この無敵だった CSU が大敗し、第一党ではあり続けたものの、1962年以降で初めて過半数を失った(但し SPD も後退し、議会初進出の「自由選挙人派」が第三党となった)。大敗の原因は、カリスマ的指導者シュトイバーが退陣し、後を引き継いだギュンター・ベックシュタイン首相、エルヴィン・フーバーCSU 党首の二頭

体制が統率力を発揮できなかつたことにある。両者は共に失脚し、代わつて連邦食糧・農業・消費者保護大臣だったホルスト・ゼーホーファーが州首相・党首に就任したが、CSU 単独では政権が担えず FDP との連合政権となった。

2013年のバイエルン州議会選挙では、第一党としては揺るがない CSU が単独過半数を奪還できるかが焦点となっていた。結果は、CSU だけで得票率47.7%、101議席獲得（180議席中）の勝利で、CSU 単独政権への復帰を可能にし、ゼーホーファー人気の高さを示した（とはいえシュトイバー期までの得票率は回復できなかったが）。驚きなのは、このとき前回より投票率が上昇したのに、保守党の得票率も上昇したことである。だが従来と同盟相手の FDP は得票3%で阻止条項を克服できず、バイエルン州議会から消滅した（バイエルン州の選挙法では連邦のそれと違い、得票が5%を下回った政党は小選挙区で何議席獲得しても議席0になる）。この事態を受けて、連邦議会選挙でも FDP 残留が危ないという気運が生まれた。それはすなわちメルケル政権の危機を意味する。

(2) **ドイツ連邦議会選挙 (2013年9月22日)**：投票当日は、ミュンヘンでは青空が広がり、オクトーバーフェスト二日目の民俗衣装行列が盛大に挙行され、民俗衣装のウーデ市長夫妻、ゼーホーファー州首相夫妻も馬車で登場した。好天に恵まれ、投票率も上昇した。

18時に両公共放送が出した予想は、CDU/CSU の勝利であった。19時頃の予想では、一時 CDU/CSU で単独過半数獲得とされたが、結局は過半数に僅かに足らなかつた。なお CSU は1週間前の勝利を上回り、バイエルン州で49.6%の圧勝であった。投票率が上昇したのに保守勢力が増大したのは、1週間前と同様である。9月24日の『南ドイツ新聞』選挙特集版は、全国の小選挙区で CDU/CSU が勝利したところを黒く塗り、それが全国に津々浦々に広がっていることから、「黒い共和国」と銘打った。なかでもバイエルン州、バーデン＝ヴュルテンベルク州、ザクセン州、ザールラント州、テューリンゲン州、ザ



CSU の選挙ポスター（ミュンヘン＝フルステンリート・2013年9月22日）

クセン＝アンハルト州、メクレンブルク＝フォルポンメルン州では、CDU/CSU が全ての小選挙区で勝利し、完全に黒となった。

けれども CDU/CSU の連立相手の FDP は、得票率4.8%で阻止条項を克服できず、史上初めてドイツ連邦議会から姿を消すことになった。得票率5%未満でも、小選挙区で3議席以上取ればFDPは比例分配に与えられるし、1あるいは2議席でも取ればそれはそのまま安堵されるが、FDPの小選挙区での獲得議席は0であった。党首レースラーなどは自分の選挙区(ハノーファー第一農村部)で2.9%しか取れない有様であった¹⁵⁾。選挙戦最後の「ZDF ポリト・バロメーター」(9月19日)では、FDP支持は5.5%であり¹⁶⁾、辛くも連邦議会に残るかとも思われたが、バイエルン州議会での負の流れを引き摺ったようである。FDPの前の獲得票の内、2110000票がCDU/CSUに、530000票がSPDに、430000票が新興の「ドイツのための選択肢」に流れたという¹⁷⁾。

SPDは25.7%(前回23.0%)で増加した。戦後最悪だった前回より若干の回復であり、シュタインブリュックを始めSPD指導部も一応安堵の色を見せたが、依然として低調であることに変わりはなく、赤緑政権樹立にも程遠い。史上最高であったブランド政権の1972年が45.8%、シュレーダー赤緑政権が誕生した1998年が40.9%であったことを思えば、25.7%は勝利とは全く言えない数字である¹⁸⁾。CDU/CSU優位の流れの中で、減少しないで済んだのを喜ぶしかないということであろう。

2009年に大連合批判の票を取り組んだ3党は、今回はどれも後退する結果となった。左派党は8.6%(前回11.9%)で減退したが、FDPが消滅したことで第三党に躍り出たため、ギジは「我が党が第三党になるなど、1990年の段階で誰が予想しただろうか」と述べ、殆ど勝利した様な上機嫌であった。これまで左派党が獲得してきた旧東ベルリンの4つの選挙区(ベルリン＝パンコウ、ベルリン＝マルツァーン・ヘラーズドルフ、ベルリン＝リヒテンベルク、ベルリン＝トレプトウ・ケペニック)は、今回も維持された。今回は緑の党も8.4%(前回10.7%)で減退した。従来から同党が唯一占めてきた選挙区(旧東西ベルリンに跨るベルリン＝フリードリヒスハイน์・クロイツベルク・プレントラウアーベルク＝オスト)では、今回も同党のハンス＝クリスティアン・シュトレーベレが勝利した¹⁹⁾。

「ドイツのための選択肢」が4.7%まで躍進したことは、今回の選挙の最

大の注目点であった。指導者ルッケらはこの結果を受け、「自分たちは新しい国民党になった」、「自分たちは諸政党に恐れることを教えた」と意気軒昂で、既に2014年のヨーロッパ議会選挙に照準を当てている。

海賊党は不振であった。破竹の勢いであった2012年前半までとは打って変わり、報道番組では殆ど問題外の扱いであった。海賊党の唱えるプライバシーの保護は、今回の選挙戦で特に争点化することはなかった。

因みに今回の連邦議会議員選挙では、移民的背景を有する議員が更に増えた。ジェム・エズデミル（緑の党）は従来から有名で、フィリップ・レースラーもお馴染みになったが、今回の選挙では11人のトルコ系候補が当選し、ジェミレ・ギオウソウフなどはCDUに属している。また黒人議員（SPD）カランバ・ディアビはセネガル出身の化学者である。移民的背景を有する議員の各会派における割合は、SPDが6.3%（12人）、CDU/CSUが2.9%（9人）、左派党が10.9%（7人）、緑の党が11.1%（7人）である²⁰。移民系議員が増えると、移民系＝多文化主義者ではないことが明確になり、移民系内部の路線の相違が顕在化することだろう。

(3) **ヘッセン州議会（2013年9月22日）**：連邦議会と同じ日、ヘッセン州では州議会選挙が行われた。結果は、CDU38.3%（47議席）、SPD30.7%（37議席）、緑の党11.1%（14議席）、左派党5.2%（6議席）、FDP5.0%（6議席）であった。傾向は連邦議会と共通するものがあるが、SPD、緑の党がより強い点が異なっている²¹。FDPは22日夜中までは議席喪失という予想であったが、翌日明け方に5%を僅かに超えて比例配分に参加することができた。

4. 今後の政治課題

(1) **メルケル政権の多難**：奇妙なことに、CDU/CSUは勝利したことにより、友党FDPの票を吸い取ってしまい、メルケルの政権形成及び政権運営がきわめて困難な状況に陥った。CDU/CSU・FDP全体での議席数は今回減少し、過半数を割り込んだのであって、野党政治家が「黒黄政権は再選されなかった」（abgewählt）と述べるのは正しい。FDPの得票4.8%は、まるごと死票になったのである。

メルケル政権誕生のためには事実上、大連合政権の模索しかない。黒緑政権は非現実的である。CSU党首ゼーホーファーもCDU政治家ライエン

も緑の党に不信感を隠さないが²²⁾、政治理念の距離が有り過ぎるのは確かである。今回有権者が作り出した政党分布を踏まえて、SPDは大連合政権入りすべきだという圧力の下に置かれた。ARD アンケート(9月27日)によると、SPDは政権入りすべきだという声は回答者の51%であったという(野党でいるべきとするのは39%)しかし大連合政権には、SPDの多くの党員は及び腰であった。前回の大連合政権(第一次メルケル政権)で連邦大臣を務め、今回も党内で大連合政権に向けて動きつつある党首ガブリエルやフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤーに対して、一般党員からは脱党を示唆した恫喝が行われた。第一次メルケル政権時のように与党第二党として埋没し、2017年に予想される次の連邦議会選挙で、更に敗退することを恐れる心情も、SPDには大変強い。連邦評議会でメルケルと対峙するノルトライン＝ヴェストファーレン州首相クラフトは、大連合に大反対である。SPDの助力を必要とするCDU/CSUの窮状に付け込んで、SPD指導部が有利な条件で連立を組もうと戦略的に振る舞うのは当然である。第一次メルケル政権も選挙から成立まで65日も掛かっており、今回も難航が予想される(10月22日段階でまだ交渉の行方が見えていない)²³⁾。

実はメルケルは、今回の選挙でCDU/CSUが過半数を獲得しても、SPDと密接な協力関係を築く必要性に迫られていた。というのも、連邦議会と共同で立法作業を行う連邦評議会(Bundesrat)で、SPDが支配的だからである。ドイツ版「ねじれ」がある以上、メルケルはどのみちSPDと妥協せざるを得なかったのである。

連邦議会選挙後の政権形成が毎度難航する事態を踏まえて、ベルリン自由大学歴史学教授パウル・ノルテは、比例代表制で議席配分を決めるドイツの選挙制度の弊害を指摘し、勝敗が明白になる小選挙区制(多数代表制: Mehrheitswahlrecht)で議席配分を決める制度を提案している²⁴⁾。今後FDP消滅後の連邦議会選挙で毎回政権形成の難航が繰り返されると、ノルテのような小選挙区制待望論が増大する可能性がある。

(2) **メルケル後の人材不足**: 強い指導者は競争相手の存在を許さないもので、退陣後に混乱を引き起こすというのは、ヴェーバーがビスマルクについて述べたことである。かつて日本やバイエルンでは、小泉純一郎、シュトイバーのあとに同じ問題が起きた。前述のようにメルケルの対抗馬が次々没落していくなかで、メルケル後のCDU指導が問題になる。

いまメルケル以外で目を惹いている CDU 政治家は、二世政治家で連邦労働社会大臣のウルズラ・フォン・デル・ライエン（旧姓アルブレヒト）だろう。連邦議会選挙直前の『デル・シュピーゲル』の政治家人気投票で、ライエンはガウク、メルケル、ショイブレ、クラフトに次いで、シュタインブリュックと並び5位につけている²⁵⁾。ライエンは医学博士で、7人の子を出産し、政治家歴は長くないが、21世紀に入り急速に擡頭した人物である。2013年連邦議会選挙後のライエンは、大連合政権を熱心に推奨しており²⁶⁾、それが成立すれば再び入閣するだろう。とはいえライエンがメルケル退陣後の党で受け入れられるかは分からない。保育園充実を図るライエンの家族政策は、保守的家族像には合わないものであり、「社会主義的」との批判がある。大胆で忙しいライエンの行動様式は、ショイブレとは大いに馬が合うが、メルケルとは合わないとも言われる²⁷⁾。

メルケルと同じくいま絶頂の CSU 党首ゼーホーファーは、後継者育成を考慮し始めた。彼はイルゼ・アイグナーを連邦政府から州議会に呼び戻し、後継者として念頭に置きつつある。そのライバルと言われているのがニュルンベルク選出のバイエルン州財務大臣マルクス・ゼーダーだが、CSU 幹事長アレクサンダー・ドブリントも対抗馬として可能性があるかもしれない²⁸⁾。

(3) 政策論争の積み残し：ドイツの選挙は二大政党候補の一騎打ちの印象が強く、普段行われている政策論争が選挙に十分反映されない場合もある。確かに1972年のブランド政権の大勝利、1990年の東独人民議会での「ドイツのための連合」の大勝利は、特定の政策の勝利と言えるだろうが、個人の政策方針が際立たないメルケルが選挙で勝利しても、メルケルの政策が国民の支持を得たと言えるのかどうかは微妙である。ドイツで最近争われている論点は、欧州債務問題、移民問題、同性婚問題、育児手当問題、高速道路の外国人向け料金問題である。CDU/CSU と SPD で対極的な方針をどう調整するのが今後の焦点である。選挙後は、大連合政権下で増税が行われるのではという噂も出ている。

(4) 左派諸政党の分裂固定化：左派勢力は今回も合算すれば決して敗北していないが、分裂が深いために一勢力としての存在が示せないでいる。これは最近の現象ではなく、近現代を貫く現象である。

「保守」とは思想である以前に感覚である。進歩主義が「個人」の「自由」と「平等」という抽象的理念から出発し、時代に応じて次々と新しい要求



破壊された左派党の選挙ポスター
(フライブルク・2013年9月9日)

を繰り出すのに対し、「保守」はそれに危うさを感じ、継承された具体的人間関係を出发点として思考してきた。「保守」は知的営為そのものへの懐疑を含んでいるため、進歩主義と同じ程度に保守主義——知的表現としての「保守」——が発達することはない。保守主義は進歩主義に対抗する必要から生まれた便宜的なもので、「保守」の氷山の一角に過ぎないのである。従って言論界はいつも雄弁な進歩主義知識人で溢れているが、選挙をやると言挙げされない国民の感覚的部分が票に反映されるため、政界での左派勢力は言論界での進歩主義者ほどは強くない。ドイツ連邦議会の最大勢力は殆どいつも CDU/CSU であり、第一党を陥落したのは1972年、1998年、2002年だけで、実はブランド、シュミット政権期も国民が第一党に選んだのは概ね CDU/CSU だったのである²⁹⁾。バイエルンに至っては二回のヴィルヘルム・ヘグナー政権(1945-1946年 SPD・CSU(米軍による上からの任命)／1954-1957年 SPD・FDP)を除外すれば、州首相は常に CSU 党員である³⁰⁾。

左派は進むべき目標を巡り、僅かな差異からいつも分裂する。進歩主義という抽象的思考が基盤にあるため、終わりのない論争に陥り、個人間、派閥間の衝突を克服できないのである。ときにはそうした対立が、暴力に発展することまでである。1999年5月の緑の党臨時党大会で、コソヴォ戦争参加を表明した党内「現実派」の(ヨシュカこと)ヨーゼフ・フィッシャー連邦外務大臣に、党員席から赤いカラーボールが投げつけられた事件は知られている。

左派の分裂で最も損害を受けてきたのが SPD である。左派の主導権を自由主義陣営から奪ったのは20世紀初頭だが、第一次世界戦争支持を契機に内部分裂が激化し始め、脱党組はドイツ共産党を形成した。共産党は SPD を「社会ファシズム」と呼び、両党の対立は決定的となった。両党は国民社会主義党という共通の敵の前でも団結できなかった。共産党は今日の左派党の遠い起源であり、結局両党の分裂は今日まで克服されていない。左派党は全ドイツ規模で定着し、大連合政権ができれば野党第一党と

して存在感を増すだろう。社会民主党と緑の党も含め、他政党が左派党を反体制政党扱いするという現状がいつまでも続くとは思われない。ちなみに緑の党も1970・80年代の学生運動世代を吸収し、今日に到るまでSPDの取り分を減らすのに貢献している。

緑の党の敗北は同党の限界を示している。同党は2011年には、日本の東北大震災という偶発的事情に依るとはいえ、初めての州首相ヴィンフリート・クレッチュマン（バーデン＝ヴュルテンベルク州）、更に州都市長フリッツ・クーン（シュトゥットガルト市）を出すという快挙を成し遂げた。FDPと違い、緑の党はドイツ政治の中で確固たる地位を確立しており、消滅の危機は差し当たらない。一時脅威だった海賊党の没落も、緑の党にとって幸運であった。しかし定着してきたからこそ、過激が売りの緑の党は穏健化し、特色を失いつつある。今度の敗北で、長年の党指導者だったユルゲン・トリッティン、レナーテ・キューナスト、クラウディア・ロートは、今回の敗北で退場することになった。党の宰相候補であったトリッティンは選挙戦終盤、1980年代に性慾解放運動の一環としての「小児愛」（Pädophilie）自由化運動に加担したことが発覚し、児童の性的虐待からの保護の観点から問題だったと非難され、自ら改悛の情を示す事件が起きている。「小児愛」疑惑は、遂に緑の党の連邦議会議員で、同性愛者の権利を強く主張してきたフォルカー・ベックにも飛び火した³¹⁾。かつてであれば伝統破壊者として英雄視されたような項目で、いまや緑の党は批判を受けている。シュレーダー赤緑政権に入ったころから、緑の党の政治家は徐々に破天荒なイメージを弱めるようになり、大臣のフィッシャーやトリッティンは背広・ネクタイを着るようになった。これまた背広・ネクタイのクレッチュマンは、ゼーホーファーから、「市民的」に語り合える州首相仲間として好評を受けている。新たな指導層入りを噂される人々のうち、アントン・ホフライターのノーネクタイと長髪は古典的「緑」の印象があるものの、カトリン・ゲーリング＝エツカルト、ケルスティン・アンドレエ、ジモーネ・ペーターは「女性らしさ」「上品さ」の外見否定を誇示している感じがしない。アメリカ対抗文化の先鋒、近代市民の文化・道徳の破壊者という役割は、緑の党から海賊党へと引き継がれ、連邦議会の外に追い出された感がある。また世代交代に伴い、原則派と現実派という緑の党内の伝統的対立も激化するだろう³²⁾。緑の党は底辺民主主義への拘りから集団指導体制に拘った結果、「党の顔」が見えない印象があり、

これが党内対立を誘発し、他党から交渉相手として疑問視される原因となっている³³⁾。

左派諸政党に共通する難点は、彼等共通の要求項目である「平等」が「社会国家」崩壊後の状況で実行困難であるという点である。資本主義の競争原理が世界大で激化し、少子高齢化を迎えて財政削減が支配的な中で、貧富の格差が問題になっているとはしても、それを1960年代のような具合に実行することは不可能である。

(5) 「ドイツのための選択枝」進出の意味：海賊党が埋没して急速に注目度を下げているのに対し、「ドイツのための選択枝」は存在感を増している。今後の選挙での同党の戦いぶりが注目的である。得票率で5%を下回り、小選挙区も取れなかった「ドイツのための選択枝」は、議席獲得には至らなかったが、連邦共和国の国是に正面から反抗してここまで得票したことは、体制に影響を及ぼさざるを得ない。主要政党は当面「ドイツのための選択枝」を、急進ナショナリズム政党と同様に、反体制政党として拒否しているが、南欧救済批判の声が増大しつつあるという事実は、政策決定過程への圧力となるだろう。

「ドイツのための選択枝」擡頭やザラツイン論争勃発の背景には、常に道徳主義的言辞が政治を主導するドイツ政治の在り方への違和感がある。ドイツの財政削減要求に抗議するギリシアのデモ隊が、国民社会主義党服にチョビ髭を生やしたメルケルのポスターを掲げたことは、ドイツの「過去の克服」が周辺諸国によって、直接関係のない分野で濫用されていることを示すものである。既に多額の救済を行っているドイツに対するこの態度は、ドイツ社会では明らかに不誠実で忘恩的との印象を与えている。

とはいえ「ドイツのための選択枝」も、包括的な綱領を持たず、「ルッケの後ろにはリュッケがある」(リュッケ(Lücke):間隙)と言われるような「兵卒なき将校だけの軍隊」であり、政治勢力として生き残るかどうかはまだ分からない³⁴⁾。連邦議会選挙での勝利後、末端組織、特に東独のそれに、「右派ポピュリズム政党」とされる小政党「自由党」(Die Freiheit)の党員が集団で入党し、これに党首ルッケが待ったをかけるという混乱が生じている。同党の東独の末端組織には、既に入党している旧「自由党」党員が活動していて、ルッケの指示に反撥している。選挙での勝利で組織が膨張し、統制が取れなくなるというのは、海賊党でも見られたことである³⁵⁾。

主要政党が「ドイツのための選択肢」擡頭を防ぐ簡単な手立ては、彼等の政策を先取りすることである。東西統一後、ホイヤスヴェルダやロストックでの政治的庇護申請者宿舍襲撃事件を契機に、1993年にコール黒黄政権と野党第一党 SPD の協力での政治的庇護申請を制限する基本法改正が行われたことがあった。「ドイツのための選択肢」の更なる擡頭を防ぐために、メルケル政権がドイツの国益を意識した政策を取る可能性もある。第三次メルケル政権は SPD の政権入りで、第二次政権の対ギリシア（対日本）緊縮財政要求を緩和し、成長路線＝放漫財政・インフレ容認路線に転じ、ユーロ共同債導入の方向へ一定程度傾く可能性もあるが、そうすれば「ドイツのための選択肢」の勢力は増大する可能性がある。

(6) FDP の将来：FDP はいま混乱の内にある。個々の地方議会からの脱落はこれまでもしばしばあったが、連邦議会からのそれは党の威信を決定的に低下させた。州議会では、いまのところ9議会でのみ議席を有している。党首レースラー、議員団長ブリューデルレは退陣を表明したが、退陣日時は決まっていない。党財政も破綻寸前で、臨時党大会の開催が危ぶまれているのである。彼等のフェイスブック・サイトは、罵声の投稿で溢れたため閉鎖中だという。ノルトライン＝ヴェストファーレン州党代表クリスティアン・リンドナーを新党首にして再起を図ると専ら噂されているが、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州党代表ヴォルフガング・クビキ、ギド・ヴェスターヴェレの名前も挙がっている。党を立て直すに当たり、リンドナーやクビキのように社会問題への関わりを増やそうとする路線と、経済的自由主義を際立たせようとする路線との間に対立がある。

FDP は今後の州議会選挙での戦いぶりが問われるだろう。そこでも消滅が続くと、FDP はドイツ政治の話題としては終わることになるだろう。ARD 系のアンケート（9月23日）によると、FDP の連邦議会からの退場を「大変よい」「よい」と答えたのは回答者の60%にも上った³⁶⁾。とはいえ FDP は過去にも州議会選挙で次々敗北したことがあったので、今後の運命はまだ分からない。2009年選挙のように、大連合政権下では野党が選挙で有利になることが予想される。

〈補遺〉第三次メルケル政権の成立

以上は2013年10月23日段階の叙述だが、その後長い交渉の末に、同年11月27日にベルリン連邦宰相府前のパウル・レーベ・ハウスで CDU・

CSU・SPD 三党間で185頁に及ぶ「連立協定」³⁷⁾に調印がされ、同年12月17日に第三次メルケル政権が発足したので、初校段階でこの点を付記したい。

今回の連立協定は「ドイツの未来を形作る」(Deutschlands Zukunft gestalten)と題された。同協定は「成長・革新・福祉」と銘打って絶好調のドイツ経済に関する自画自讃で始まり、その基盤の上での社会福祉の充実や平等の実現を訴える項目が目につく。(1)「女性割当」(Frauenquote)：2016年以降理事を新任する上場又は共同決定の義務がある企業は最低30%女性を登用しなければならず、2015年からは幹部にどう女性を登用していくのかの拘束力ある目標を明示することになる。更に学問の領域でも女性教授を増強する方針が示されている。「男女共同参画」論に立脚し「積極的格差是正」を図る政策であるが、男女を対立する派閥のように考えている、男性への「性差別」になるなどの批判もある。(2)連邦全域での「最低賃金」(Mindestlohn)：2015年1月1日から全国で時給8ユーロ50セントの最低賃金を規定する。当初は例外を認めるが、2017年1月1日からは一切認めない。これにはドイツ経済の「立地条件」を悪化させるという批判がある。(3)非正規雇用労働者の立場強化：月収が450ユーロに達しない「ミニジョブ」労働者が所得税と社会保険料を免除されるという制度は、元来シュレーダー政権の雇用自由化政策で導入されたもので、結果として多くの非正規労働者を生んだ。シュレーダー政権後のSPDでは再び労働者の権利を重視するようになり、今回その権利についての周知徹底が明記された。(4)63歳からの年金支給：2014年7月1日より45年間掛金を払い続けた者全員に63歳からの年金を支払うもの(但し徐々に65歳に引き上げる)。少子高齢化を見据え67歳支給開始が提案されていたのを退けたもので、財政悪化の危険があるとの批判もある。(5)多重国籍容認：シュレーダー赤緑政権の制定したドイツ国籍法(2000年)では、出生地主義による移民へのドイツ国籍付与を開始しつつも、多重国籍を禁止する方針を取っていた。つまり父母の祖国での国籍とドイツ国籍とを共に有する場合、満23歳になるまでに父母の祖国の国籍を抛棄しなければ、ドイツ国籍の方が消滅することになっていたが、今後は双方ともそのまま維持できる方向を目指すことになった。教皇ベネディクトゥス一六世が二重国籍であるように、「青の国際派」、つまり貴族の世界では複数の国家への帰属は頻繁だったが、近代に国籍制度が整備され、一個人の一国家への帰属、一個人

の一国家による保護が一般化した。多重国籍に関しては、移民のドイツ社会への「統合」を妨げ、ゲッター化を促す危険性が指摘されている。(6)同性愛者間「人生パートナーシップ」(Lebenspartnerschaft)に対する不利益取扱の全廃：連邦憲法裁判所の決定に従い養子縁組の制度を再編するというが、基本法が保護する(婚姻関係にある男女とその子孫の共同体という意味での)「家族」の崩壊につながるのと、特に教会系の批判がある。左派諸政党が強く主張していた高額所得者の所得税率引上は明記されなかったが、全体としてCDU・CSUがSPDに大幅に譲歩した印象が強い。選挙で圧勝したのはCDU・CSUであったのに、事実上敗北したSPDが象徴的な要求項目を次々押し通すというのは、表明されたばかりの民意に逆行する現象だが、こうした「少数派の恫喝」は政党政治では珍しくない。前述の様な党首メルケルの柔軟性も、CDU・CSUの大幅な妥協を可能にした要因の一つだろう。とはいえ四年間の任期でこれがどれだけ実現するのかはまだ分からない。SPDの一般党员には、これだけの譲歩を引き出しても、今後四年間で予想される地盤沈下を考えれば、まだ満足できないという声が残った。但し連立協定で、第二次メルケル政権に見られた2022年までの原子力発電全廃、財政健全化、移民「統合」支援、エリート主義的文教政策などの方針が残ったこと、ヨーロッパ最大の経済大国としての責任意識、「平和と人権のための世界における責任」を担う価値観+利益外交、IT環境整備などが謳われていること、ベルリン王宮、ドレスデン王宮などの復興や、「1989年革命」を称讃する屋外展示の支援、キリスト教会との連携維持が表明されていることにも注意が必要である。因みに「アジア」の項目で「日本との友好関係はドイツ対外政策の重要な柱の一つ」とされ、中国やインドより前に書かれたが、中国やインドの様に独立した段落は設けられなかった。

アンゲラ・メルケルは12月17日に連邦議会で連邦宰相に選出され、第三次メルケル政権が発足した。話題を攫ったのはライエンの連邦国防大臣への就任であり、前述の予想通り「メルケル後継」としての独走が始まった。連邦環境大臣だったアルトマイヤーが連邦宰相府長官となり、党幹事長グローエが連邦保健大臣になったが、「メルケル側近」の域を出ない。連邦財務大臣に再任された大物ショイブレは安定感があるが、宰相への夢を断られたまま、長年酷使されている観がある。CSUは大勝しながら重要閣僚を獲得できず、僅かに党幹事長ドブリントの入閣(連邦交通大臣)

が目を惹くのみである。SPDではシュタインマイヤーが四年前の古巣に戻ったが(連邦外務大臣)、党首ガブリエルは困難を極める原発廃止担当に回されてしまった(副宰相兼連邦経済・エネルギー大臣)。今後SPDの指導は、東独出身のマヌエラ・シュヴェージヒ(連邦家族大臣)、党幹事長・元社会主義青年団(JUSO)議長アンドレア・ナーレス(連邦労働・社会大臣)の様な、40代の女性たちによって担われるのではないだろうか。初のトルコ系閣僚としてアイダン・エゾグスが移動・難民・統合担当国務大臣になったが、「統合」政策への影響が注目される。

注

- 1) Party Systemという言葉は、政治学では「政党制」と呼ばれてきたが、筆者はこの訳語に疑問を抱いている。「制」という漢字は、「予め規定された制度」という印象を読み手に与える。だが一党独裁制などは別として、自由選挙による政党の布陣状況は全て結果に過ぎず、安定しているように見えても将来の変化の可能性は常にある。その意味で、筆者は「政党分布」という言葉がより正確であると考えている。
- 2) 今回は機会がなかったが、1998年の連邦議会選挙ではCDU(8月マンハイム・9月ハイデルベルク)、SPD(9月ルートヴィヒスハーフェン)、PDS(8月オッゲルスハイム)、緑の党(8月マンハイム)の選挙集会を見学した。CDUの集会は市の広場で時間厳守で行われ、行進曲などのコンサートのあとコール宰相らの演説があり、国歌斉唱で終わった。参加者は背広など「市民的」装いの夫婦が目立ち、周囲では左派運動家が音声での妨害工作を猛烈に行っていたが、同盟青年団の整理で乱入は出来ず混乱はなかった。SPDは体育館で労働者風の人々を集めて行われ、ロック・コンサートのあとDie Gedanken sind frei!の合唱があり、大幅に遅刻してシュレーダー候補らが現れ、気軽な雰囲気で行った。PDS、緑の党の集会はギジ、フィッシャーの演説を中心とする小集会で、コンサートはなかった。CDUの集会以外では妨害者はいなかった。
- 3) <http://www.welt.de/politik/deutschland/article119191353/Polnische-Deutscheduerfen-den-Bundestag-mitwahlen.html> (2013年10月17日閲覧)。
- 4) Christiane Hoffmann, Alles schläft, Mutti wacht, in: Der Spiegel 39/2013 (21. September 2013), S. 32 f.
- 5) Gertrud Höhler, Die Patin. Wie Angela Merkel Deutschland umbaut, 3. Aufl., Zürich 2012, S. 14 f., 183 usw.
- 6) Höhler, ebenda, S. 33 f. usw.

- 7) Horald Knaup/René Pfister/Gordon Repinski, Die Machtprobe, in: Der Spiegel 40/2013 (30. September 2013), S. 23.
- 8) Dirk Kurbjuweit, Ansichten eines Clowns, in: Der Spiegel 38/2013 (16. September 2013), S. 30–39.
- 9) Der Spiegel 38/2013 (16. September 2013), S. 16 f.
- 10) Markus Deggerich, La Fontaine, in: Der Spiegel 38/2013 (16. September 2013), S. 44 f.
- 11) Friederike Schilbach (Hrsg.), Die Piratenpartei. Alles klar zum Entern?, Berlin 2011.
- 12) 今野元「ザラツィン論争——体制化した「六八年世代」への「異議申立」」、『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第14号、2013年、175–204頁。
- 13) 原語は Freistaat Bayern である。因みに「自由国」(Freistaat)とは「共和国」(Republik)の意味であり、「自由」とは本来君主の権力からの自由を意味しているが、最近では連邦の枠組からの自由という意味で誤用されることが多く、もはや新しい語義となった印象がある。なお Freistaat を「自由州」と訳すのは望ましくない。連邦の観点ではバイエルンは一つの「州」(Land)に過ぎないが、バイエルンは意図的に「国家」(Staat)を名乗って自律性を誇示しているのであって、Freistaat を「自由州」と訳すとその拘りが表現できないのである。連邦の一「州」に甘んじないという拘りは、「ザクセン自由国」、「チューリングゲン自由国」、「自由ハンザ都市ブレーメン」、「自由・ハンザ都市ハンブルク」などの名称にも見出される。
- 14) Die bayerische Landtagswahl, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 215, 16. September 2013, S. 2.
- 15) Die Welt kompakt, 24. September 2013, S. 5. レースラーの得票は「2.6%」だという情報もある (Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 222, 24. September 2013, S. 16.)。
- 16) <http://www.heute.de/Im-Endspurt-bleibt-Rennen-denkbar-knapp-29832138.html> (2013年10月4日閲覧)。
- 17) Die Wahl 2013, in: Süddeutsche Zeitung, Nr. 221, 24. September 2013, S. 15.
- 18) Bundestagswahlergebnisse, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 18 f. ちなみにブランド政権の45.2%はSPDの最大得票率であるが、CDU/CSUとの差は僅かであり、圧勝ではなく辛勝に過ぎなかった。
- 19) Die Wahl 2013, in: Süddeutsche Zeitung, Nr. 221, 24. September 2013, S. 12.
- 20) Michael Fröhlingdorf/Özlem Gezer „Die sieht ja manierlich aus“, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 48 f.
- 21) Hessische Verhältnisse, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 57.
- 22) „Mit Trittin gibt es keine Gespräche“, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 24;

- „Wer sind die Grünen?“ in: Der Spiegel [39/] 2013 (25. September 2013), S. 28–30.
- 23) Horald Knaup/René Pfister/Gordon Repinski, Die Machtprobe, in: Der Spiegel 40/2013 (30. September 2013), S. 22–26.
- 24) Paul Nolte, Absolute Mehrheit? Ja, bitte!, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 46 f.
- 25) Der Spiegel 38/2013 (16. September 2013), S. 16 f.
- 26) „Wer sind die Grünen?“ in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 28–30.
- 27) Peter Müller, Die Krabbenfreundschaft, in: Der Spiegel 38/2013 (16. September 2013), S. 42 f.
- 28) Peter Müller/Conny Neumann, Agenda 2018, in: Der Spiegel 39/2013 (21. September 2013), S. 38 f.
- 29) Bundestagswahlergebnisse, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 18 f.
- 30) Die bayerische Landtagswahl, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 215, 16. September 2013, S. 2.
- 31) Ann-Katrin Müller/Christian Teevs, Das grüne Verdacht, in: Der Spiegel 39/2013 (21. September 2013), S. 34 f.; „Mit Trittin gibt es keine Gespräche“, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 24.
- 32) Ralf Beste, Heimliche Quote, in: Der Spiegel 40/2013 (30. September 2013), S. 36; Dirk Kurbjuweit, Locken im Wind, in: Der Spiegel 40/2013 (30. September 2013), S. 37.
- 33) „Wer sind die Grünen?“ in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 29.
- 34) Melanie Amann/Ann-Katrin Müller, Nach Lucke die Lücke, in: Der Spiegel, 25. September 2013, S. 32 f.
- 35) Ortverbände wollen Populisten aufnehmen, in: Der Spiegel 41/2013 (7. Oktober 2013), S. 14.
- 36) Michael Gebauer et al., Ende einer Dienstfahrt, in: Der Spiegel 40/2013 (30. September 2013), S. 32 f.
- 37) <https://www.cdu.de/sites/default/files/media/dokumente/koalitionsvertrag.pdf> (2013年12月19日閲覧).